徳島大学教養部紀要
（人文・社会科学）
第十七巻　別刷
１９８２

「ニーベルンゲンの歌」とハルトマン作「イーヴァイン」

――名誉（êre）と英雄たち――

石　川　栄　作

徳島大学教養部紀要
（人文・社会科学）
第十七巻　1982

「ニーベルンゲンの歌」とハルトマン作「イーヴァイン」

——名誉（êre）と英雄たち——

石　川　栄　作

Das Nibelungenlied und Hartmanns Iwein

——êre und Helden——

Eisaku ISHIKAWA

Zusammenfassung

Die Vorstellung von *êre* spielt sowohl im *Nibelungenlied* wie auch in Hartmanns *Iwein* eine wichtige Rolle. Wir möchten hier den wesentlichen Unterschied zwischen den beiden Werken klarmachen, indem wir beobachten, wie ihre Helden sich um die *êre* bemühen.

Die *êre* führt und treibt am stärksten den *grimmen* Hagen, den Mann der Initiative gegenüber den eigenen Burgundenkönigen. Seine *êre* knüpft sich nämlich an das Dämonische. Das Epitheton *grimme* bedeutet es schon. Er stirbt am Ende in höchstgewahrter Ehre als ein unentwegter Held, ohne sich vor dem verhängnisvollen Untergang zu fürchten. Er vertieft damit das ihm eingeborene Dunkle ins absolut-undurchdringliche Dunkel.

Zum Unterschied von dem *grimmen* Hagen tritt Rüedegêr als höfisch-hochsinniger Ehrenmann auf. Er gerät aber wegen dieser Ehrlichkeit in eine innerlich-tragische Situation, wo er schließlich dem Verhängnis des Verfalls folgen muß. Er hat also etwas mit Hagen gemein: den germanischen Geist, dem Untergang nicht auszuweichen, sondern gegen dessen Verhängnis anzustürmen.

Auch die *êre* Sîvrits, der die hohe Minne der schönen Kriemhilt erstrebt, endet gleicherweise mit dem Tod. Das tragische Schicksal, das die Welt des Nibelungenlieds beherrscht, zerstört die ehrenvolle Liebe zwischen Sîvrit und Kriemhilt.

Ganz anders als die *êre* dieser Nibelungenritter ist die *êre* Iweins, dessen Leben doch gleichfalls ganz voll von Leid ist. Der Ritter Iwein nämlich, der zur versprochenen Zeit die Rückkehr vergißt, gerät in seine eigene Schuld. Das bedeutet den Verlust seiner *êre* in der ritterlichen Welt. Das schweres *leit* zwingt ihn zum elenden Leben. Iwein wird aber durch demütige Buße, gute Tat und innere Wandlung reif für Gottes Gnade. Das Seelenheil nicht zu verlieren und auch in der Welt in Ehren zu bestehen, d.h. *Gotes* und *der werlt hulde* zu vereinigen, das ist das Ziel in Hartmanns *Iwein.* Dieser Standpunkt unterscheidet sich vom *Nibelungenlied,* wo z.B. Rüedegêr in dem schwersten Konflikt *aller êre abe stân* (2153,2) muß, um wenigstens die *sêle* zu retten. Hier liegt der grundsätzliche Unterschied zwischen dem *Nibelungenlied* und Hartmanns *Iwein,* nämlich dem Heldenepos und dem höfischen Artusepos.

1. はじめに

12世紀末期から13世紀初期に至る約50年間（1180-1230）[1] は、ドイツ文学史上最初の興隆期と

1）この時代区分はフリードリヒ・マウラーに依る。Vgl. Friedrich MAURER: Die Welt des höfischen Epos. Der Deutschunterricht 6, 1954. S. 5.

も言われ、抒情詩（ミンネザング）と叙事詩の領域で見事に華麗な花を咲かせた時期であった。ここに取り扱う作者不明の「ニーベルンゲンの歌」とハルトマン・フォン・アウエの「イーヴァイン」のほかに、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの「パルチファル」並びにゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの「トリスタンとイゾルデ」等は勿論この時期を代表する作品である。これら諸作品において各々の詩人によって描出される社会はことごとく雅やかな宮廷的騎士社会である。アルトゥース王伝説を題材としたハルトマンの「イーヴァイン」は言うまでもなく、古代ゲルマンの伝説・英雄歌謡に素材を求めた「ニーベルンゲンの歌」でさえも、そこに展開された社会は疑いもなく華麗な宮廷的騎士社会なのである。「イーヴァイン」の初めに見られる聖霊降臨祭、「ニーベルンゲンの歌」ではニーデルラントの王子ジーフリトの刀礼式に始まって以後さまざまな機会に催される饗宴等が考えられよう。そのほかの作品においても宮廷的騎士社会の描写は枚挙にいとまがないが、要するにこれらは雅やかで気高い社会であり、歓びの世界である。そこで繰り広げられる各種の競技や婦人奉仕等がその歓びの世界を一層気高いものにしている。

このような宮廷的騎士社会においてとりわけ重要な役割を演じているのが êre（名誉）という観念である。宮廷的騎士はこの êre を求めて行動するのであり、この êre の観念こそは実に騎士の行動を支配する一大原動力である[2]とも言えよう。しかし、この êre を求めて活動する騎士たちの内面的生活は、外面的な華麗な騎士社会とは対照的に、悲劇的苦悩や精神的葛藤に満ちた生活である。「ニーベルンゲンの歌」とハルトマンの「イーヴァイン」においてもまた然りである。しかし、この両作品は、この êre の力の支配下にある勇士たちがその苦汁に満ちた生活の中でいかに振る舞い、いかなる行動と態度とを取っているかとなると、お互いその本質を異にしているようである。本稿では、この êre という観念に焦点を合わせて、成立年代もほぼ同じ（1200-3年頃）と見なされるこの両作品における勇士たちの行動を比較考察しながら、両作品の文学的本質の相違を探ってゆくことにしたい。

2. ミンネと勇士たち——ジーフリトとイーヴァイン——

まず宮廷的騎士の êre（名誉）の一つと考えられる貴婦人の愛（ミンネ）から始めることにしよう。ミンネは騎士たちに名誉の感情を抱かせ、彼らを駆り立てるものの一つなのである。「ニーベルンゲンの歌」のジーフリトもまた然りであり、ブルゴントの国に世にも美しい乙女がいるという噂を聞いて（44,2)、彼は自らその乙女の愛を求めて旅立つのである。彼女の並々ならぬ美しさと気高い心ばえは広く世に知られ（45, 1-2)、「位高き乙女の愛」(hôhe minne, 47, 1) を求めていたジーフリトにとって、この高貴な王女の愛を得れば大きな名誉である（vgl. 49, 2-3)。しかし、それだけにブルゴント国に到着したジーフリトは悩み（136)、この姫への愛のためには幾多の「苦しい目」(arbeit, 137, 4) にあわねばならない。ザクセン勢とデンマルク勢に対す

2) 相良守峯：ドイツ中世叙事詩研究（冨士出版株式会社1948年、郁文堂1960年）39頁参照。

る戦いがまずその最初の「労苦」(arbeit, 137, 4; leide, 138, 4) である。戦闘で手柄を立てることによって、ジーフリトはその祝宴で王女クリエムヒルトに初めて会える機会を得るのである。しかし、クリエムヒルトの美しさに直面して今度はミンネザング風の「妄想」(wân, 285, 2) に陥る。ミンネの苦しみ (285) をも味わねばならないのである。その苦しみの果てにジーフリトはついに出会いの挨拶が許された (290) ばかりか、姫より口づけを受ける (297, 3) ことになる。これを見て、先の戦いでジーフリトによって人質として捕えられていたデンマルクの国王はこう言う。

《diss vil hôhen gruozes　　lît maneger ungesunt
(des ich vil wol enpfinde)　　von Sîvrides hant.》(298, 2-3)

「こんな特別の恩寵があればこそ、ジーフリト殿の手で、
あまたの勇士が傷を負わされたのだ。それはわしにも覚えがある。」

ミンネの力がいかに勇士を駆り立てるかを明確に示している詩行と言えよう。王女の心を得るためにジーフリトほど尽くした者もない (296, 4) のである。その後ブルゴント国に留まったのも彼女の恵みに与かるため (258, 4; 260, 1-2; 304) なのであり、さらにその後プリュンヒルトを求めてのグンテル王の求婚の旅に随行したのもただ姫のため (333; 388; 535; 536) だったのである。

このような幾多の「苦難」を克服した末にやっとクリエムヒルトの愛を得、彼女を妻にすることができたジーフリトとは逆に、成程同じように女性のミンネを求めて旅立ったグンテル王のプリュンヒルトに対する愛は、しかし、どちらかと言えば肉欲的な愛 (vgl. 631, 3; 632, 3) として語られている。自らの手ではなく最初からジーフリトの援助でもって得た愛であってみれば、それも当然であるが、しかし、プリュンヒルトが自分に身を捧げようとしないことを悟ると、愛を戦いとるために彼女の着衣を掻き乱し (636, 1)、そのために手足を縛られ、壁の釘に吊されてしまった (637) グンテル王は、まさに不名誉 (641, 1) である。この肉欲的なグンテル王の愛は、ジーフリトの「高きミンネ」の誉れをきわ立たせていると言えよう。ジーフリトのミンネを求めての数々の冒険は、こうして名誉あるものにまで高められており、その名誉が高ければ高いだけ、のちに起こる悲劇はそれだけ一層深いものとなるのである。

それでは、ハルトマン・フォン・アウエの「イーヴァイン」の場合はどうであろうか。主人公イーヴァインはこの叙事詩の初めの方で親類の一人カーログレナントの話を聞いて、成程のちに妻となるラウディーネの国へと旅立つが、しかしジーフリトのようにミンネを求めてではなく、カーログレナントの身に起こった恥辱の復讐 (806-7) のため、言い換えれば騎士としての名誉のためである。ラウディーネの国の不思議な泉と石の魔力に恐れをなして尻込みするなら騎士として不名誉である。そこでイーヴァインは皆に先んじて一人ひそかに出かけてゆく (963) のである。そこで彼はジーフリトと同じようにミンネに出会う。しかし、彼のミンネの動機はジーフ

リトと異なって官能的である。すなわち、ラウディーネの身体があらわになっているところを見たイーヴァインは、彼女の髪と肌の美しさに心を奪われ、我を忘れてしまった（1331-7）のである。彼もジーフリトと同じようにミンネの苦しみを味わうが、しかしジーフリトのような「ミンネ妄想」ではない。彼の苦しみは全てがラウディーネの夫アスカローン王を殺したことに端を発している。アスカローン王を殺すことによって彼は冒険を成功のうちに収めたが、宮廷に帰ってそれを証明できなければ彼の名誉は失われる（1726-9）。しかし、立ち去ってその夫人の姿を見ることができないくらいなら名誉などどうでもよい（1731-7）。と言って、ここに留まっていても夫殺害ゆえに彼女の恩寵は得られまい（1618-20）。名誉とミンネの二つがこのように彼を悩ませたのである。この「苦しくも楽しい」イーヴァインの言葉（1752-6）を賢明にも理解したラウディーネの侍女ルネーテの取り計らいで、イーヴァインはついにラウディーネと結婚することになるが、しかし、その際大きな決め手となったのは騎士の持つ武力、言い換えれば騎士の名誉である。すなわち、立派な騎士に護ってもらわない限り自分の国が滅びてしまうことを気遣った（2058-61）ラウディーネは、イーヴァインにこう言って求婚するのである。

《her Îwein, niene verdenket mich,	「イーヴァイン様、私があなたを
daz ichz von unstæte tuo,	こんなに早く許すというのは、
daz ich iuwer alsô vruo	私に操がないからだ、
gnâde gevangen hân. (2300-3)	などと悪く取らないで下さい。
…	…
sît ir mînen herren hânt erslagen,	あなたは私の夫を倒したのですから、
sô sît ir wol ein sô vrum man,	きっと大変勇敢な方でしょう。
ob mir iuwer got gan,	神様が私にあなたをお与え下さるなら、
sô bin ich wol mit iu bewart	私はあなたによって、
vor aller vremder hôchvart. (2322-6)	どんな異国の傲慢な侵入からも護られます。
…	…
ichn nœtlîche iu niht mê.》(2332)	私はもうあなたの敵ではありません。」

夫ジーフリトを殺害されてハゲネに復讐せずにはいられなかった「ニーベルンゲンの歌」のクリエムヒルトからすれば、この「イーヴァイン」の世界は正反対である。「イーヴァイン」には神が介在しており、争いは好まないのであり、作品中の言葉を使って表現すれば、誠実に（mit triuwen）悲しみ（leide）を償い（ergetzen）[3]，辛い目にあわせただけその者を一層幸せにすることのできる（2069-72）のが「イーヴァイン」の世界なのである。こうしてめでたく結ばれたイーヴァインの結婚は、ミンネの動機こそ異なれ、ミンネの力に屈服せざるを得なかった点、成程ジーフリトの場合と同じであるが、しかし、ジーフリトの場合、完成された愛がその後脆くも

3）このハルトマンの作品に対して「ニーベルンゲンの歌」においては決して悲しみ（leit）を償う（ergetzen）ことはできない。悲しみ（leit）は復讐（rechen）されねばならないのである。この leit と ergetzen 並びに leit と rechen に関する詳細は拙稿：「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」における leit の研究（徳島大学教養部紀要―人文・社会科学―第16巻1981年）191-8 頁参照のこと。

運命の力によって壊されて悲劇に終わるのに対して、イーヴァインの場合は結婚後ようやくミンネの試練が始まり、ミンネはその後の冒険の旅によって浄化され高められて、よりすばらしい幸福な結末に到達するという点、まさにこの点に「ニーベルンゲンの歌」とハルトマンの「イーヴァイン」の本質的な相違があると言えよう。従って、「イーヴァイン」の場合、結婚に至るまでのミンネの物語よりは、むしろミンネを獲得したのちの冒険の方が重要である。それについてはのちに述べることにしよう。

3. êre とトロネゲの獰猛なる (grimme) 勇士ハゲネ

トロネゲの勇士ハゲネにとっても重要な役割を演じているのが êre（名誉）の観念である。絶えず名誉に目を向けながらハゲネはブルゴント国王の重臣として生きている。名誉 (êre)，すなわち、彼の国王の声望 (Ansehen)[4] は、常にハゲネの心の中にあり、彼はその名誉を全身で護るのである。しかし、彼の êre はデモーニッシュなものと結びついている。ハゲネの性格がまず最初に紹介されるジゲムントの警告にはこうある。

《Ob ez ander niemen wære　　wan Hagene der degen,
der kan mit übermüete　　dér hôhverte pflegen,
daz ich des sêre fürhte,　　ez müg' uns werden leit,
ob wir werben wellen　　die vil hêrlîchen meit.》(54)

「例えば、あのハゲネという豪傑のことだけ考えてみても、
あれは思い上がって、無礼なこともしかねぬ男だ。
もし我々が、あの申し分のない娘を所望でもしたら、
我々の身に災いをかもす恐れがないとは言えぬ男だ。」

このハゲネは、あらすじの悲劇的展開には必ず関与しているという悪魔のような存在であり、ジーフリトとはほとんどの点で正反対の人物として語られている。従って、ジーフリトの存在はハゲネにとって好ましくない存在であり、出会った最初の瞬間からすでに敵である。ジーフリトが戦闘や求婚の旅でことごとく成功を収めるたびにその存在はハゲネにはますます嫌な存在となり、それだけに一層彼は主君たちの êre（名誉）である勢力と地位のことを心配しなければならない。クリエムヒルトとプリュンヒルトの口論で殺害の口実を得たハゲネは、ジーフリトが亡き者となったらいかに勢力の強化になるかを力説する (870)。国王らの反対にも拘らず全てがハゲ

4) 中高ドイツ語の êre を新高ドイツ語の Ehre という概念と同一視してはならないことは、フリードリヒ・マウラーも指摘している通りである。êre は主として具体的な意味を持っており、いわゆる外面的・客観的な名誉（äußere, objektive Ehre）を意味しているのであって、例えば Ansehen, Anerkennung, Geltung, Würde あるいは Sieg, Erfolg, Glück, Lohn, Gewinn さらに Pracht 等というような語でその都度適宜に理解されなければならない。(Vgl. Friedrich Maurer: Tugend und Ehre. 1951. S. 340., F. Maurer: Die Einheit des Nibelungenlieds nach Idee und Form. 1953. S. 56., F. Maurer: Die Ehre im Menschenbild der deutschen Dichtung um 1200. 1969. S. 409. In: Dichtung und Sprache des Mittelalters. Francke Verlag Bern und München 1971.)

ネの思い通りに進み、ジーフリトを暗殺したあと、ハゲネはこう言う。

Dô sprach der grimme Hagene:　《jane weiz ich, waz ir kleit.
ez hât nu allez ende　unser sorge unt unser leit.
wir vinden ir vil wênic,　die getürren uns bestân.
wol mich, deich sîner hêrschaft　hân ze râte getân.》(993)

獰猛なるハゲネが言った。「なぜお嘆きになるのか分かりません。
我々の心配も悩みも、これですっかり片づきました。
我々に楯つくような人間はもういなくなりました。
この男の権勢を挫いてよかったと思っているのです。」

プリュンヒルトの恥辱の復讐（873, 3; vgl. 1790, 3-4）がただ口実に過ぎなかったことがこの言葉で明白である。ハゲネの本来の望みは、ジーフリトを亡き者とすることによって、自らの国王の êre（権勢）を護ることだったのである。しかし、今度はクリエムヒルトの復讐を警戒したハゲネは、彼女の財宝を奪い取らねばならない。権力であり、本来の êre を意味する財宝を強奪することによって、ハゲネは彼女の勢力を弱めると同時にグンテル王の勢力増加を計ろうとする（vgl. 1107）のである。そのためにはクリエムヒルトとブルゴント国間の和解が必要であり、ハゲネは和解を進言する。それが財宝のためであることは改作の写本 C（1127）[5] からも明白である。和解のあと、クリエムヒルトが財宝をニーベルンゲンの国からブルゴントの国へ移すと、ハゲネは――国王兄弟の反対にも拘らず――その財宝を奪い取ったばかりか、ゲールノートの提案（1134）を巧みに利用して、最後には財宝をライン河に沈めてしまったのである。

このようにハゲネはグンテル王の臣下であるが、国王らの反対にも拘らず全てがハゲネの望み通りに進んでおり、ハゲネこそ実際の指導者であると言える。しかし、そのハゲネが初めて自分の提案を貫き通すことのできないときが来る。エッツェル王求婚のときとフン族の国への招待を受けたときの二つの場面がそれである。いずれの場合にもハゲネ一人のみが反対するが、初めてハゲネの進言が拒否されるのである。こうしてハゲネの忠告は二度にわたってその効力を失っていたが、しかし、ゲールノートとギーゼルヘルとの非難めいた言葉（1462-3; vgl. 1512）に名誉を傷つけられたハゲネは、怒りに燃えてそのフン族の国への招待の旅に同行することを決意する。

《ine wil, daz ir iemen　füeret ûf den wegen,
der getürre rîten　mit iu ze hove baz.
sît ir niht welt erwinden,　ich sol iu wol erzeigen daz.》(1464, 2-4)

「私以上にフン族の宮廷へ行く勇気のある者を、
旅路にお連れになることなどはあり得ません。
どうしてもおやめにならないからには、私の勇気のほどをお目にかけましょう。」

5) この写本 C における和解についての詳細は拙稿：「ニーベルンゲンの歌」写本 C におけるクリエムヒルトの復讐―写本 B との比較において―（日本独文学会中国四国支部「ドイツ文学論集」第13号1980年）80-1 頁参照のこと。

このときからハゲネの êre は、国王の声望を護るというよりは不屈の精神を貫き通す武士の名誉である。不吉な夢（1510; vgl. 1509）ももはや彼の邪魔をしない。名誉（vgl. 1510; 1512）のためなら、どんな恐怖にも左右されはしない（1513,1）。この決意でもってハゲネは再び内的な自由を取り戻したのである。

こうして困難に立ち向かって進んでゆくハゲネの勇壮たる姿は、一見、イーヴァインの――不思議な泉と石の話を聞いて恐れをなさずに危険な冒険の旅へと出かけてゆく姿、並びにジーフリトの――とりわけクリエムヒルトの不吉な夢にも拘らず策略の戦闘へと勇敢に出かけてゆく姿によく似ている。しかし、ハゲネの姿がこの両勇士の場合と異なっている点は、ハゲネは自らの破滅を自覚しているということである。成程ジーフリトは結局は死ぬことにはなるが、しかし旅立ちの際その死を認識していたわけではない。それに対してハゲネは破滅をしかと認識していたことは疑いがない。彼が武装をして出かけるようにと忠告した（1471, 3-4）のも、まさにその死の認識のためである。その滅亡の認識が最も明白になるのは、旅路の途中でドーナウ河を渡るときである。王室の司祭以外は誰も生きて帰れないという占い（1542）を妖精の一人から聞いたハゲネは、ドーナウ河を渡る際、司祭を船から投げ落とす（1576）。しかし、司祭は泳ぎもできなかったのに神に救われて元の岸にたどり着くことができたのを見て、ハゲネはその水の乙女の占ったことが避けがたい運命であることを悟った（1580, 2-3）のである。

> er dâhte:《diese degene müezen verliesen den lîp.》(1580, 4)
>
> 彼は思った。「これらの勇士は滅びなければならない。」

しかし、この瞬間ハゲネの内から英雄的なものが生じてきたのである。英雄的なものは「ある」(sein) のではなく「成る」(werden) ものであることはすでに拙稿[6] で述べた通りである。ハゲネが真に英雄なのも滅亡を自覚し自らそれに向かって突き進んでゆくまさにこのときからである。ドーナウ河を渡ってしまったあとでハゲネは船を打ち壊わして流れに投じてしまうが、これも滅亡を恐れない勇敢なハゲネの英雄的精神の成せる行為である。帰るときにいかにして河を渡るのかというダンクワルトの質問に対して、「二度とそのようなことはあるまい」(1582, 4) と答えるハゲネはさらに続けてほかの者たちにも滅亡の自覚を促す。

> Dô sprach der helt von Tronege: 《ich tuon iz ûf den wân:
> ob wir an dirre reise deheinen zagen hân,
> der uns entrinnen welle durch zägelîche nôt,
> der muoz an disem wâge doch lîden schamelîchen tôt.》(1583)
>
> トロネゲの勇士はなお続けた。「我々の今度の旅路で、

6) 拙稿：「ニーベルンゲンの歌」―宮廷文学作品としての一考察―（「かいろす」第14号1976年）10頁並びに拙稿：「ニーベルンゲンの歌」におけるリュエデゲール悲劇の特質（「かいろす」第19号1981年）287頁参照のこと。

臆病気を出して逃げて帰るような卑怯者があった場合、
そういう徒輩はこの河で惨めな死を
遂げる方がよいと思うので、こうやっておくのだ。」

まさにこの不屈の英雄精神のためにフォルケールはハゲネを尊敬するようになり（1584)、両者の間には揺ぎない友情が芽生えてくる。それは勿論例えばイーヴァインとガーヴァインの間のように共に生を構築するといった友情ではなく、共に戦い共に死ぬといった友情である[7]。このように滅亡の運命を悟っても、フォルケールと共に英雄的なものへと自らを高めるハゲネは、寄せて砕ける波の中の巌であり、揺ぐことのない英雄となったのである。

フン族の国に到着してこのハゲネが中心人物となるのは必定である。彼は今や単なる防衛という消極性に甘んじる男ではなく、クリエムヒルトの挑戦に反抗するという態度を見せる。ジーフリトの剣を持ってクリエムヒルトの前に現われる挑発的な態度（1783-4）等がそれである。以後、いかなる苦難にあってもハゲネは決して揺ぐことのない勇士であるが、その中でも最も彼の強さを明示しているのが最終場面である。疲労のために捕えられてクリエムヒルトの前に突き出されたハゲネは、財宝のありかを尋ねられても国王兄弟との誓約を持ち出すことによって、ついにはクリエムヒルトにグンテル王の首を刎ねさせる。

《du hâst iz nâch dînem willen　　z'einem ende brâht,
und ist ouch rehte ergangen,　　als ich mir hête gedâht. (2370, 3-4)

den schaz den weiz nu niemen　　wan got unde mîn:
der sol dich, vâlandinne,　　immer wol verholn sîn.》(2371, 3-4)

「あなたは思いのままに決着をおつけなされた。
それはまたわしの考えた通りの成り行きであったのだ。

今や宝のありかを知るものは、神とこのわしのほかは一人としてござらぬ。
鬼女よ、あなたには宝は永久に隠れたままに相成り申そう。」

死に直面したこのハゲネの最後の言葉は最高の強さを発散させている。名誉が最高に維持されたまま嘆くこともなく滅びていったハゲネは、巌のように揺がぬ英雄として不屈の精神を絶対化する中で強く生きたのである。例えば、ジーフリトやディエトリーヒは成程ハゲネより外面的により強く理想化されて語られているが、しかし、内面的な強さと不屈の精神においてはハゲネが疑いもなく第一人者である。ハゲネは生まれつきの暗さを絶対的な暗さにまで押し進めたのであった。詩人によってハゲネの形容詞としてたびたび用いられる grimme も、「地下」と「悪魔」の意味を含んでいる[8]。ハゲネの不屈の精神は まさに暗い悪魔の力であるということを詩人はその

7) Vgl. Gottfried Weber: Das Nibelungenlied—Problem und Idee. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung. 1963. S. 48-9.
8) Vgl. Gottfried Weber: a. a. O., S. 57.

語でもって常に意識していたのではないか。ハゲネの êre はまさにデモーニッシュなものと結びついており、ハゲネの êre あるところ常に悪魔が潜む暗黒の世界なのである。

4. êre とベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲール

リュエデゲールの場合にも êre の観念が重要な役割を演じていることはハゲネの場合と同様である。しかし、獰猛なハゲネとは逆に、リュエデゲールはまずは「気高く品位ある騎士」として登場する。彼の徳性はエッケワルトの言葉の中で明確に表現されている。

《Der sitzet bî der strâze　　und ist der beste wirt,
der ie kom ze hûse.　　sîn herze tugende birt,
alsam der süeze meie　　daz gras mit bluomen tuot.
swenne er sol helden dienen,　　sô ist er vrœlîch gemuot.》(1639)

「あの方はこの街道筋に居を構えており、世に住む人のうちでも
最も立派な城主です。彼の胸が徳性を育むことは、
さながら快い五月が草木の花を育てるに似ており、
武士たちの世話をすることが、あの方には歓びなのです。」

客人たちを優雅にもてなすことは彼にとっては大きな名誉だったのである。しかし、この名誉感情のために彼は悲惨な状況[9]へと追い込まれてゆくことにもなる。ブルゴント族とフン族との戦いとなったとき、名誉にかけて彼はブルゴント族を相手に戦うことはできない。ブルゴント族は彼がベッヒェラーレンで歓待したばかりか、フン族の国へと案内した客人でもあり、さらに娘を王弟ギーゼルヘルに嫁がせる約束をもした間柄だからである。しかし、一方フン族のエッツェル王には臣従の義務があり、またクリエムヒルトにはエッツェル王求婚の際に真心より誓った誓言があるので、彼はフン族の国王夫妻を見捨てることもできない。名誉はまさに彼の運命の分かれ目である。クリエムヒルトが彼にかつての誓いを思い出させて助力を願い出ると、彼は名誉（êre）と魂（sêle）を区別してこう嘆く。

《Daz ist âne lougen:　　ich swuor iu, edel wîp,
daz ich durch iuch wâgte　　*êre* unde ouch den lîp.
daz ich die *sêle* vliese,　　des enhân ich niht gesworn.
zuo dirre hôhgezîte　　brâht' ich die fürsten wol geborn.》(2150)

「あなた様に名誉（êre）や生命をも捧げると
お誓い申し上げたことは否みは致しませぬ、気高いお妃様。
しかし魂（sêle）までも犠牲にするとは誓いませんでした。
私はあの生まれ貴い王様方を自分でこの饗宴にお連れ申したのでございます。」

9) リュエデゲールの悲劇的状況については拙稿ですでに述べたので、本稿では説明を最小限に止める。詳細は拙稿：「ニーベルンゲンの歌」におけるリュエデゲール悲劇の特質（「かいろす」第19号1981年）参照のこと。

リュエデゲールの真の êre（名誉）の根底にあるものは sêle（魂）であって、財産・権勢ごときものではない。真心（triuwe）を失ってこの場で死ぬくらいなら、領土も城も全ての財をも投げ捨てて、もって生まれた足で異国へさすらいの旅に出かけたい（B 2157; C 2215-6）ことはテクストからも明白である。しかしこの望みはリュエデゲールにとっては可能ではない。国王と臣下の絆は断ち切れないほど強いものであり、さらに国王夫妻は彼にますます援助を願い出るからである。このようなリュエデゲールの「苦悩」（2159-61）に対してクリエムヒルトが無慈悲な要求を続けたとき、彼の決意も定まった。それは勿論破滅の決心である。

しかし、まさにこの瞬間ハゲネの場合と同様にリュエデゲールの内からも英雄的なものが生成してきたのであり、討死を望んで破滅の戦場へと向かう彼はもはや宮廷的騎士ではない。勇敢にして誉れ高い武将たるに恥じない働きぶりを示すリュエデゲールの行為（2213）はまさに古代ゲルマンの英雄さながらの行為である。滅亡すべき宿命を感じ知るに至っても回避せずに、反対にその運命に向かって突き進んでゆく異教的・ゲルマン的英雄という点でリュエデゲールの êre はハゲネの êre と同じである。その限りにおいては、詩人によって賛嘆されるリュエデゲールの「美徳」（tugent）は古い意味に属する「英雄的行為[10]」を意味していると言えよう。

しかし、彼の「美徳」（tugent）は単なる「英雄的行為」のみならず、宮廷的な「気高き徳性」（hochherzige tugent）をも意味している——この点ハゲネとは異なる——ことは勿論のことである。それが最も明らかになるのが楯贈与の場面である。自らの楯を気前よく贈与するという高貴な心は宮廷的基盤において成長した花である[11]。このリュエデゲール最後の贈物に接して心を動かされたハゲネの動揺も、リュエデゲールのこの「宮廷的美徳」を強調するものである。このようにリュエデゲールの死の中には異教的・ゲルマン的なものと宮廷的なものとが素晴らしく融合しているのであり、その両方面からの tugent に支えられて彼は辛うじて彼の êre（名誉）、つまりはその根底にある sêle（魂）を救っているのである。しかし、その魂の救いは例えばハルトマンにおけるようなキリスト教的なものではなく、結局はそれが英雄的な死と結びついているところにリュエデゲール悲劇の特質があるのであり、その限りにおいては上でも述べたようにハゲネの êre と一致するところもあると言えるのである。

5. êre とアルトゥース宮廷騎士イーヴァイン

このようなハゲネ及びリュエデゲールの êre とは全く性質を異にしているのがアルトゥース宮廷騎士イーヴァインの êre である。イーヴァインにとっても êre は自分を駆り立てる重要な観念である。イーヴァインはカーログレナントより不思議な話を聞いて一人ひそかに騎士の名誉を求めて旅立ち、そこでラウディーネのミンネに出会い、侍女ルネーテの仲立ちで彼女と結婚をする

10) Vgl. Matthias Lexer: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. S. Hirzel Verlag. (*tugent*=Männliche Tüchtigkeit, Kraft, Macht, Heldentat.)

11) Vgl. Hans Naumann: Rüdegers Tod. DtVjs. 10, 1932. S. 399.

ということは上ですでに述べた通りである。冒険とミンネの二つを見事に克服してイーヴァインは êre（名誉）を得たかに見えた。しかし、のちにそこへやって来た親友ガーヴァインの忠告(2770-2912）によると、その êre は束の間のものであることがほのめかされる。

《Ir hât alsô gelebet unz her	「君はこれまで、立派な騎士らしく
daz ichs an iu niht wandel ger,	名誉を心がけて暮らしてきたが、
nâch êren als ein guot kneht:	私は君にそれを変えてほしくはないのだ。
nû hât ir des êrste reht	今こそ君は、
daz sich iuwer êre	君の名誉を
breite unde mêre.》(2899-2904)	広め増やすべきなのだ。」

ガーヴァインは、要するに、得られた êre を維持し長続きさせるためには新たな騎士としての修業を怠るべきではないことをイーヴァインに諭すのである。そこで、この忠告に従ってイーヴァインは、妻の許しを得て一年の約束で修業の旅へと出かけてゆく。しかし、騎士の活動に熱中しているうちにその約束の期限を忘れる。自分の怠慢に気がついた（3084-5）ときは、もはや遅すぎた。あとを追って来た侍女ルネーテが騎士たちの面前でイーヴァインを侮辱する（3111-96)。しかし、この屈辱的な恥辱に接して彼は初めて自分の罪（schulde）というものに気がついた。

Er verlôs sîn selbes hulde:	彼は自分自身に愛想がつきた。
wan ern mohte die schulde	なぜなら、彼はその罪を
ûf niemen anders gesagen:	他の誰の所為にもできなかったのだから。
in hete sîn selbes swert erslagen.	彼の剣が城主を打ち殺したのであるから。
(3221-4)	

彼の罪はそもそもアスカローン王殺害とそのときの慈悲深さの欠如にあったのであり、それが今やルネーテの侮辱で初めて明らかとなったのである。イーヴァインの騎士としての名誉（êre）は失われ、彼は全く惨めな姿でさすらいの旅をすることになる。しかし、善なる神は彼を完全に見捨てたわけではなかった（vgl. 3261-3)。惨めながらも行く先々で救いの手が差し出され、イーヴァインの場合真の êre を求めて今ようやく贖罪としての冒険の旅が始まるのである。

まずその第一の冒険がナリゾーンの婦人たちをアーリエルス伯の傲慢な侵入から解放することである。イーヴァインは今や防衛者の役割を果たしているのであって、以前のような不法な攻撃者ではない[12]。しかもアーリエルス伯を以前のアスカローン王のときのように殺しはしない。捕えるだけ（3776-84）である。勝利を収めたイーヴァインは、かつてのラウディーネのように、そこの女主人より求婚される（3819）が、それを拒否して贖罪の旅を続ける。それでもってラウディーネに対する真心を守ったと認められよう。

第二の冒険は、龍とライオンとの激しい戦い（3839-40）で窮地に追いこまれていた高貴なラ

12) Vgl. Thomas Cramer: *Sælde und êre* in Hartmanns *Iwein*. Euphorion 60, 1966. S. 39.

イオンを救い出すことである。ライオンは法の象徴であり、龍は悪の象徴である[13]。ライオンを龍の爪から解放することでもって、イーヴァインは法を悪の牙から救っている[14] のである。以後このライオンはイーヴァインと共に行動し、イーヴァインは名を語らずに「ライオンを連れた騎士」と呼ばれるようになる。

第三と第四の冒険は、約束の期限を破ったかつてのイーヴァインに対する試練の決闘であるとも言える。まず彼はライオンと共に旅を続けるうち、運命の手に導びかれて、愛するラウディーネの国へとやって来て（3923-5)、侍女ルネーテと再会することになる。しかし、彼女は恐ろしい苦難にあっていた。イーヴァインの怠慢ゆえに、彼女が不実とされ翌日の昼には死刑に処せられる（4040-1） というのである。そこで彼は、彼女を訴えた内膳頭とその兄弟の三人と翌日決闘をして彼女を救い出す[15] という約束をする。この約束の戦いが第四の冒険であり、その前に第三の冒険を果たすことになる。つまり、その夜宿泊を求めた城でイーヴァインは、城主――その妻がイーヴァインの親友ガーヴァインの姉である――より悲惨な事情（4456-4506）を聞いて、翌朝ハルピーンという名の巨人と戦って城を窮地から救い出すことを約束するのである。

Swer ie kumber erleit,	苦しい目にあったことのある者は、
den erbarmet des mannes arbeit	何の苦しみも
michels harter dan den man	経験したことのない者よりも、
der nie deheine nôt gewan. (4389-92)	ずっと人の苦労に同情するものである。

その城主がイーヴァインを丁重に出迎えた場面で、ハルトマンはこのように語っているが、イーヴァインのこの約束の場面にもこれがあてはまる。以前と違って、贖罪の旅を続ける今のイーヴァインには「憐れむ（erbarmen）心」があるのである。しかし、夜が明けてイーヴァインは巨人ハルピーンを待ち受ける(4822-4）が、なかなか現われないので、彼は êre (4832) のことを心配し始める。もうルネーテのための決闘に出かけなければならない時刻なのである。そのために再び悲しくなった城主は、彼に財宝を差し出すことを口にして、なおも助力を願うが、イーヴァインは財産のために命を賭けるのではないことを強調する（4835-45)。今や彼の êre は、財産に基づくものでないことが明らかである。悲しみで真っ青になった城主らは彼の親友ガーヴァインの名にかけて哀願する(4846-58）だけに、イーヴァインはますます苦境に陥り迷うことになる。

《ich weiz wol, swederz ich kiuse,	「いずれを選んでも
daz ich an dem verliuse,	破滅の身となることはよく分かっている。
…	…
ich bin, als ez mir nû stât,	私は、このままの状態なら、

13) Vgl. Thomas Cramer: a. a. O., S. 39.
14) Vgl. Thomas Cramer: a. a. O., S. 39.
15) すなわち、ハルトマンの説明（5429-35）によると、その当時は、戦うように法廷に訴えられていた者が、その戦いに勝つことによって無実ということになれば、その者が受ける筈であった死を、反対に訴えた本人が受ける習わしだったのである。

gunêret ob ich rîte	出かけても不名誉の身となるし、
und geschendet ob ich bîte.	ここにいても恥辱を受ける。
nune mag ichs beidiu niht bestân	私は両方を成し遂げることはできないし、
und getar doch ir dewederz lân.	さりとて両方を見捨てることもできない。
nû gebe mir got guoten rât.》(4877-89)	神よ、私によい教えを与え給え。」

イーヴァインはこの二つの決闘の約束を名誉にかけて破るわけにはゆかない。ルネーテはその苦悩をただ彼の所為で受けており、しかも二度までもルネーテに対して不実を行なうわけにはゆかないのであり、一方その城主の妻の弟ガーヴァインには友としての恩義がある。一方を捨てて他方を行なっても彼の名誉は破滅し、さりとて両方とも見捨ててしまえば、一生涯恥辱を受け続けるであろうというイーヴァインの懊悩は、すでに考察したリュエデゲールの場合と同じである[16]。しかし、表面的に同じなのであって、本質的には異なる。イーヴァインの場合、巨人が時刻通り現われるならば、彼は二つの約束を果たすことができるのである。果たして神の恵みによってイーヴァインの待っていた巨人は姿を現わし、彼の迷いや嘆きは取り除かれた（4914-5）のである。こうして今や善を行なう彼には神の恵みとまたライオンの助けもあって、巨人ハルピーンとの戦い並びに内膳頭ら三人の屈強な騎士との戦いで見事に勝利を収め、それぞれの被害者を――しかもルネーテの場合には王妃ラウディーネの面前で――救い出すことができた。ルネーテのほかには誰にも名を明かさなかったイーヴァインは、ラウディーネに傷の治るまで彼女のもとに留まるよう懇願される（5459-64）が、愛しい人の愛を取り戻すまでは安らぎも喜びもない（5466-9）ことを告げて悲しくもそこを立ち去る。今や王妃によって神の恵みに委ねられた（5534-40）イーヴァインは、最後の難関へと進むのである。

最後の難関――それはアルトゥース王の面前で行なわれる親友ガーヴァインとの対決である。それは要するにシュヴァルツ・ドルン伯の他界に伴なって二人姉妹の間に生じた遺産相続をめぐっての決闘であった。悪賢い姉は妹より先にアルトゥース王宮廷へ行ってガーヴァインを味方につけていた（5666-9）が、しかしそれを誰にも話さないという条件つきであった（5676-7）。そこでイーヴァインは途方に暮れている妹の方の助力をする約束をし（6062-72）、ここについにイーヴァインとガーヴァインがお互いを知ることもなく、アルトゥース王の面前で相争うことになったのである。しかし、この最も困難な決闘の前に――ちょうど第三と第四の冒険のときと同じような構成になっており――イーヴァインはまたもや巨人、しかし今度は二人の悪魔の巨人と戦わねばならない。これが第五の冒険である。すなわち、ガーヴァインとの決闘の約束をした日の晩彼が宿泊した城で、彼は三百名の女性たちが人質として惨めな生活を強いられているのを見た（6190-3）のであるが、その婦人たちを解放するための戦いがそれである。翌朝その二人の巨人と戦うが、このときにもライオンの助けがあって、三百名の女性たちを解放することができた。

16) 詳細は拙稿：「ニーベルンゲンの歌」におけるリュエデゲール悲劇の特質（「かいろす」第19号1981年）107-13頁参照のこと。

そこの城主は自分の娘と国とを差し出す（6800-1）が、イーヴァインはそれを拒否し、ある女性以外の夫にはならないこと（6802-11）を口にする。ここでもラウディーネへの真心を守っていると言える。イーヴァインはぐずぐずしてはいられなかった。第六の冒険としてガーヴァインとの決闘の時刻が近づきつつあったのである。イーヴァインは――このときライオンは途中で残してきた――何とか遅れずにアルトゥース王宮廷に現われた（6900-1）。時刻に関する二度目の試練をも克服したのである。ガーヴァインはすでに来ていたが、両者とも武具を身につけていたため二人とも相手が誰だか分からない。この決闘ほどイーヴァインにとって困難なものはない。ライオンの助けがないからではなく、勝っても負けても彼は êre を失うことになるからである。このときのことをハルトマンはこう語っている。

und swennern überwindet	一方が他方を打ち負かし、
und dâ nâch bevindet	そのあとで誰を負かしたのかを
wen er hât überwunden,	知るならば、
sone mac er von den stunden	そのときからその者は
niemer mêre werden vrô. (7061-5)	もはや幸福にはなれない。
…	…
wan sweder ir den sige kôs,	両者のうち一方が勝利を得たとしても、
der wart mit sige sigelôs.	その者は勝利で敗れたことになる。
in hât unsælec getân	幸福への期待が
aller sîner sælden wân. (7069-72)	その者を不幸にしたのである。

もしそうなれば、それは以前の第三と第四の冒険の際の悩みよりさらに深い苦悩である。しかし、これまでの冒険で善を行なってきたイーヴァインには神の恵みがあった。朝に始まった決闘は昼を過ぎても夕方となっても決着がつかないのである。翌日まで決着が延期されて休戦となった（7356-7）とき、両者は初めて言葉を交わし、お互い相手の êre を誉め称えているうちに、相手が誰であるか（7470-83）を知った。この二人が自分の êre を犠牲にしてお互い相手の栄誉（prîs）を称え合っている光景はアルトゥース王に大変喜ばれる（7643-7）こととなり、そこでその遺産相続問題は全てアルトゥース王の判断に委ねられ（7653）、円満に解決することとなるのである。さらにそこへライオンがやって来て、イーヴァインが「ライオンを連れた騎士」であったことが明らかとなり（7740-2）、その姉を窮地より救い出してもらっていたガーヴァインとイーヴァインとの間の友情がますます深まったことは勿論のことである。

以上見てきたこの贖罪としての六つの冒険は、それ以前の不法な冒険とは全く性質が異なっていることが明らかである。かつてカーログレナントの話を聞いて出かけて行った冒険は、利己的な êre を得るべく行なったものであるばかりではなく、不思議な石に水を注ぐという行為によって不法にもその国の秩序を乱す結果ともなった[17]のである。従って、イーヴァインの罪は、よ

17）泉は支配と所有の象徴であり、泉の主人は国の主人であると考えられよう。（Vgl. Thomas Cramer: a. a. O., S. 41.）

り詳細に言えば、彼がラウディーネの国に出かけて行ってその夫アスカローン王を無慈悲に殺害し、その国の秩序を乱したばかりか、暴力的に一人の女性とその国を手中に収めたということにあった[18] と言えよう。それゆえにイーヴァインは二つの冒険で報酬として差し出された女性と国とをその悔い改めとして二度にまでわたって拒否しているのである。今やこうして贖罪としての冒険を続けるイーヴァインは、ある人間を個人的に助け出すという行為でもって超個人的な法秩序のための戦いを行なっているとも言えよう。なぜなら、第一、第三、第五の冒険が「困窮している人たちのための戦い」であるならば、第二、第四、第六の冒険は「法のための戦い」であるという全体の整然たる構成[19] も読み取られうるからである。このように六つの冒険を通してイーヴァインは数々の試練にあい、それらを見事に克服して今やラウディーネの愛を再び得る資格ができたと言えよう。イーヴァインによって窮地から救い出された忠実な侍女ルネーテも彼に対してその恩を返さずにはいなかった。こうしてまたもやルネーテの仲立ちでイーヴァインはラウディーネの、しかも今度は真実の愛を得ることとなった。すなわち、無私の行動によって正しい善 (rehte güete) を示すという正しい秩序の道を辿ってきた今のイーヴァインには、そのため神の恵みによってようやく長続きする「幸せ」(sælde) と「名誉」(êre) とが得られたのである。ハルトマンもこの作品の冒頭でこう語っている。

Swer an rehte güete	真に正しいものに
wendet sîn gemüete,	意を向ける者には、
dem volget sælde und êre. (1-3)	幸福と名誉が与えられる。

「名誉」(êre) を求めて生きる者は「善」(rehte güete) を行なわなければならないのである。そこに「憐れみの心」が必要なのは言うまでもあるまい。従って、ハゲネやリュエデゲールの êre とは異なって、イーヴァインの真の êre とは神によって認められた êre であり、それは憐れむ心と無私の行動で善を行なうことによって初めて得られる êre であると結論づけることができるであろう。

6. おわりに

このように「ニーベルンゲンの歌」と「イーヴァイン」において描出される社会は雅やかな宮廷的騎士社会であるが、しかし, êre を求めて活動する騎士たちの内面的生活は、表面的な華麗な騎士社会とは対照的に、悲劇あるいは苦汁に満ちた生活である。甘いうちにも苦々しい体験を強いられたジーフリトのミンネも完成と同時に脆くも崩れ落ちてしまう。グンテル王の声望に絶えず気を配るハゲネの êre も最初からデモーニッシュなものと結びついていて、最後にそれが破滅することは必定である。リュエデゲールの êre は、成程ハゲネと異なってキリスト教的基盤に

18) Vgl. Thomas Cramer: a. a. O., S. 40.
19) Vgl. Thomas Cramer: a. a. O., S. 39.

おいて成長してきた宮廷的な êre を持ち合わせてはいるが、しかしその êre の板挟みという最も辛い精神的葛藤の末に結局はハゲネと同じ êre の破滅に終わる。これら「ニーベルンゲンの歌」における勇士たちの êre に対して「イーヴァイン」の êre は全く性質を異にしているが、しかしその内面的生活が苦汁に満ちている点では彼らの場合と同じである。すなわち、ラウディーネの愛とその国を手に入れたことで êre を得たかに見えた主人公イーヴァインは、親友ガーヴァインの忠告に従って騎士の修業の旅を続けるうちラウディーネとの約束を忘れて罪に陥る。それが彼に辛い leit (苦しみ)、言い換えれば騎士社会における彼の êre (名声と地位) の喪失をもたらす。そこでイーヴァインは惨めな生活を強いられるのである。しかし、「イーヴァイン」がここで「ニーベルンゲンの歌」と本質的に異なる点は、心からの懺悔と立派な善の行為を通じて内心から変身することによって主人公イーヴァインは神の恩寵を得るまでに成長するということである。つまり、名誉 (Ehre)——罪 (Sünde)——苦悩 (Leid)——懺悔 (Buße)——神の恩寵 (Gnade) というイデー[20] が支配しているハルトマンの作品の世界では、贖罪としての善の行ないによって神の恩寵が生じ、騎士は再びその êre, しかもより純化され高められた永遠の êre を手に入れることができるのである。従って、「ニーベルンゲンの歌」と異なる点は、「イーヴァイン」の êre には世間の恩寵 (der werlt hulde)、すなわち社会における êre のほかに、神の恩寵 (gotes hulde)、すなわち神の恵みによる êre が加わっているということである。しかもこの二つの êre は常に直接密接な関係にあると言える。神の恩寵を失う者は社会での名誉を失うのであり、社会での名誉を失う者は同時に神の恩寵を失うからである。この両者を統一するという課題こそ「イーヴァイン」におけるテーマだったのである。否、「イーヴァイン」に限らず、12世紀末期から13世紀初期にかけて見事な開花を見せた「宮廷騎士文学」におけるテーマであったとも言えよう。人間の罪と神の恩寵との関係をハルトマンよりもさらに深く追究したヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハはその「パルチファル」のエピローグでこう語っている[21]。

swes leben sich sô verendet,	誰にせよその生涯を終えたとき、
daz got niht wirt gepfendet	現世の罪によって
der sêle durch des lîbes schulde,	魂を汚して神を失うことなく、
und der doch der werlde hulde	しかも現世の恵みをも
behalten kan mit werdekeit,	立派に守りえた場合、
daz ist ein nützîu arbeit. (827, 19-24)	その苦労はかならず報われるのである。

神の恩寵 (gotes hulde) を失わず、しかも世間の恩寵 (der werlt hulde) をも保って生きてゆくこと、すなわちその二つの êre を統一するということこそがヴォルフラムに限らずハルトマンにおいても最高の理想であり、ハルトマンの人間生活の最高の目的だったのである。「ニーベルン

20) Vgl. Friedrich Maurer: Die Welt des höfischen Epos. Der Deutschunterricht 6, 1954. S. 9-10.

21) 引用は次のテクストに依る。Karl Lachmann/Eduard Hartl: Wolfram von Eschenbach. 1. Band: Lieder, Parzival und Titurel. Walter de Gruyter & Co. Berlin 1952. なお、邦訳は加倉井蘭之・伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一共訳「パルチヴァール」(郁文堂1974年) から引用させて頂きました。

ゲンの歌」との比較において言うならば、リュエデゲールのように最も辛い苦悩（leit）の中で少なくとも魂（sêle）を救い出すためにこの世のあらゆる名誉（êre）を投げ出すという態度ではなく、神の êre と社会の êre というこの二つの êre が一つに統一されることをハルトマンは最高の理想・目的としたのである。まさにこの点に「ニーベルンゲンの歌」とハルトマンの「イーヴァイン」、ひいては「英雄叙事詩」と「アルトゥース宮廷叙事詩」との間の本質的な相違があると結論づけることができよう。（1981・9・22）

※両作品のテクストはそれぞれ次のものを用い、またそれを邦訳で説明している部分に関してはそれぞれ次のものを参照・引用させて頂きました。

「ニーベルンゲンの歌」

Helmut de Boor (hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage. F. A. Brockhaus Wiesbaden 1972.

相良守峯訳「ニーベルンゲンの歌」（前・後編）　岩波書店（岩波文庫）1975年

「イーヴァイン」

G. F. Benecke und K. Lachmann (hrsg.): Hartmann von Aue, Iwein.

Band 1. Text. Walter de Gruyter & Co. Berlin 1968.

赤井慧爾・武市修訳「イーヴァイン」(1)～(3)

神戸女子薬科大学人文研究２～４号1974～76年